

紹介

谷 泰著

『牧夫フランチェスコの一日』

——イタリア中部山村生活誌——

最近、牧畜文化論やそれとキリスト教との関係を扱った諸論考で、ユニークな文化人類学者として注目を集めている筆者が、今度は、その牧羊を担った村人たちの生活を、都市化・過疎化の問題を横軸にして、暖かい筆致で描き出してみせてくれた。

舞台はクエルチーノ村。イタリアの中部山地に位置し、伝統的に羊の移牧を村の生業としてきた、戸数七六戸の小さな村である。地中海地域の夏の乾燥、冬の寒さは、羊を牧する者に、夏の山地と冬の平地との季節的移動を余儀なくさせる。このような移牧形式は、地中海地域一帯に広く分布するが、少くとも中世にさかのぼるこの村も、そのような移牧村のひとつであった。「移牧、それは、この地域で羊を飼いつづける限り、行なわねばならない自然の課した掟であり、なん百年となく、いやなん千年となく繰り返された生活のリズムであった」。また、「もっとも近い町に出るだけで、ロ

バのつて一時間はかかるこの山地村」では、よりよい職業につくための機会は閉ざれていた。「村に残る青年たちは、やはり伝統的な、村の祖先たちが代々繰り返してきた牧夫稼業を続けてゆく以外、生きるすべはなかったのである」。

この村の変容は第二次大戦を契機に訪れる。徴兵による都会人との接触、戦後の土木工事で現場の賃銀労働者として働いた経験、これらは多くの牧夫たちを、筋肉労働者として、伝統的牧夫稼業から離脱させ、道路の整備が、村の都市化・過疎化に輪をかけた。村には自動車があふれ、「夏のヴァカンス時になると、ローマやスイスに一家ごと移出した旧村人」が、都会人として避暑に戻ってくる。そんな村へと変容し、人口は戦前に比して半減、牧夫もわずか二人となってしまった。

筆者はこのようなクエルチーノ村に入り、一九六九年から一九七五年までに計四回の滞在調査を行なっている。筆者の調査動機は以下の二点である。(1)羊移牧の実態を調査すること、(2)都市化・過疎化にみまわれた山村での変化を考えること。本書のテーマも、またこの二点から成り立っている。しかし筆者はここで、いわゆる民族誌的

記述方法とはとらない。筆者が共に住み、語った村人たち数人を取りあげて、その「生きざま」を、内面の描写まで含めて、しかしなお三人称で記している。それゆえ、本書全体の流れとして、変容しつつある山村での村人たちの意識、対応の仕方に中心をおきつつ、随所に、もう一つのテーマも配慮するという方法がとられている。本書の構成は以下の通りである。

全体の序ヘイタリアの山の村からの後、筆者はヘーレオナルドの遍歴で、少年期より出稼ぎ牧夫、巡回の梳毛業者として暮してきた男の生涯を通して、村の戦前より現在までの歴史や牧羊業全般の序章を述べる。そして続く三章ヘⅡ 村を出たマッテオヘⅢ 牧夫フランチェスコの一日ヘⅣ ある夏の日のカリノーで、「村の変容が急激に始まる以前に、青年期をすごした」人たちが、その後の急激な変容にどう対応したかを、「出かせぎという形で対応」した者、「独立した牧夫」として残った者、「村の伝統的生活様式や価値観を完全にはすてぎれず」といって新しい都市的波にも適応しえない」者、という三人の生き方を通して描き出している。そしてヘⅤ 司祭の試みで、この村の近代化に努めつ

つも、結局は「よそ者」として挫折した司祭の試みを通して都市化の意味を考えて、村の伝統的生き方とはもはや無縁の若者たちを描くへⅣ 若者たちのあした、あるいは村の行方へ」とつないでいる。

本書のテーマのひとつ、変容しつつある村での人々の生きざま、についてはここで多言を要すまい。「人間の生きざまは、それほどたがいに異質なものではない。言葉を通じあい、たがいに親しくつきあうとき、そのような文化的表象の衣服の下に、心の琴線にふれあえる暖かい血が流れているのだということに、気づくにちがいない」と繰り返して説く筆者の暖かさに支えられて、十分に読者の共感をさそうはずである。

より多くの議論は、本書全体の表題でもあるⅢに集約的に展開される牧畜論に向けられるであろう。牧夫の一日を通してみた羊移牧そのものの紹介や、そこから発展する牧畜文化とキリスト教との関連には、大いに興味をそそられる。例えば、牧羊ではその群れ管理上、オス羊のほとんどは生れてすぐ殺され、種オスと誘導羊のためのごく少数が残されるにすぎない。そしてこの誘導羊は、去勢された後、人間の言葉を解するまでに徹底的に訓練され、人間と羊群

の中間に立つ者として羊群を誘導する。筆者はここから、「牧者」「よき羊飼ひ」等の言い古されたキリスト教と牧羊とのイメージ連関をさらに一歩すすめて、キリストそのものの、「嬰兒段階で、選ばれたものとして(ヘロデの)大量虐殺を免かれ、その後、自己の男としての性を実現しないものとして信者群のリーダーになってい」き、しかも同時に「神の声の体現者」であるという位置どりは、まさにこの誘導羊に対応する、と説明している、云々である。紙幅の都合上一例のみあげたが、この種の鋭い分析は今後大いに議論の的となるう。

最後に本書の記述形式についても一言触れておかねばならない。本書は個人の生きざまの集成の上に成り立っている。この方法は、筆者みずからも認めるように、アイリーン・パウワの『中世に生きる人々』の方法と深い関連をもち、また、「規範化された行動様式、構造化された認識のパターン、そういった異なる文化との比較を通じて明らかにされる形式の記述よりも、接触を通じて個人の生きざまを理解する方が、異文化の人びとを、より身近かに感じさせてくれることがある」という筆者の信念の所産である。そしてこの方法は、筆者の意

図した「共感の糸口を準備」し、「文化を異にする地域に住んでいる、われわれと同じ人間の生きざまを記す」という点においては、たしかに有効であると思われる。しかし、このことと、断絶、あるいは文化の異質性をあくまで前提として、なおその社会に生きる人々をヴィヴィッドな形で再現することを目的としたパウワと異なり、「人間の生きざまは、それほどたがいに異質なものではない」という意識を前提にし、しかも、われわれの等しく経験する都市化・過疎化を背景とする本書で、パウワが歴史の分野でもちえた有効性を、文化人類学の分野でもちうるか、ということとはまた別問題である。しかしこのことは、代置すべき方法の示されていない現状では今後の議論にまっしかなく、また新たな方法を試みた本書の価値を減ずるものではない。

ともあれ本書は、その淡々とした筆致の衣の下に、様々な問題点を秘めた労作であると信ずる。

なお本書は、一九七六年度角川日本ノンフィクション賞を受賞した。

(B6判 二三八頁 一九七六年八月 日本放送出版協会(NHKブックス)六〇〇円)

(田中峰雄 京都大学大学院生)